

ハイパー英単語辞書における OED の 'with' を対象としたケーススタディ

大出 真† 蔡 東生† 池辺 八州彦‡

† 筑波大学電子情報工学系
‡ 会津大学コンピュータ理工学部

我々は、語学教育の改革は辞書の改革なくして有り得ないという立場に立ち、英単語学習のための、新たな形式の辞書についての研究を推進している。今回の研究では、Oxford English Dictionary(OED)に記載されている英単語が持つ歴史情報について着目している。本稿では、OEDの歴史情報から見た英単語 'with' についてケーススタディを行うとともに、この結果を参照できる試作した簡単なインターフェースについても説明する。

A Case Study about 'with' in Oxford English Dictionary for Hyper English Dictionary

Makoto Ohde† Tousei Sai† Yasuhiko Ikebe‡

† Institute of Information Sciences and Electronics, University of Tsukuba
‡ School of Computer Science and Engineering, University of Aizu

We are taking up the position that there's no reformation of linguistic education without the reformation of dictionaries. We propel the research of newtype English dictionary for learning English words. Now we notice the historical information of words in Oxford English Dictionary. In this paper we describe a case study about 'with' from the viewpoint of historical information in OED. Also plain interface to which we can refer for the information about this result is exemplified.

1 はじめに

語学を学習するにあたってもっとも重要かつ、使用頻度の高い書物が辞書であることは間違いない。長い間、辞書は紙という媒体に縛られてきたが、近年の計算機やインターネット普及に伴い、紙という媒体に縛られない新しい形式の辞書を創ることが可能となっている。我々の研究室ではそのような次世代の新しい形式を持った辞書をハイパー辞書と呼称しており、このような辞書をつくり一般に公開することを究極の目標にして研究してきた。

勿論、英語辞書といってもその用途に、また使用者のレベルに応じて様々な種類の辞書が存在する。我々はひとまず、英単語学習者を対象とした辞書の研究に取り組んできている。前年度の研究では、英単語学習法のひとつとして印欧語根を用いたものを提案し、それを辞書のデータとして用いることで生じる学習効果について検証した。

今回の研究では同じく効果的な英単語学習という見地から、歴史的原理に基づいて編纂されたという世界最大の英語辞書の一つである Oxford English Dictionary (以後 OED と略) に注目し、その構造を探るとともに、その歴史情報が単語の理解にどのように役立っているかを、特に最頻出かつ理解の難しい英単語 'with' を例にとってケーススタディした。ここではそのケーススタディの結果とともに、それをインターネット上で参照できるよう試作したインターフェースについて説明する。

2 英単語 'with' のケーススタディ

2.1 目的

OED は収録語数が 40 万を越す世界最大の英語辞典のひとつである。OED とそれまでの辞典との大きな違いはその編纂方針にある。それは、あらゆる語を収録するということと、'on Historical principles'、歴史的原理に基づいて編纂するということである。具体的には、1150 年以降の英語の文献に用いられたあらゆる単語の語義と綴り字の歴史の変遷の過程を、文献から抜き出した例文によって明らかにするという方針をとっている。

今回特に 'with' を選んだのは、様々な語義を持ち日本人には理解することが難しい単語を、OED の特徴である歴史的情報から眺めることでどのような学習効果が得られるかを検証する良い例になると考えたからである。

2.2 OED の構成について

まず、'with' のケーススタディを行う前に OED の構成について簡単に説明する。OED において、各単語は基本的に表 1 の要素で構成されている。

<i>identification</i> (発音、語形変化 etc.)
<i>etymology</i> (語源情報)
<i>signification</i> (語義)
<i>illustrative quotations</i> (引用例文)

表 1: OED における各単語の構成要素

'identification' 情報の中には発音、属

性等の他に、いつの時代にどんな場所でどのような語形が使われていたかということが記されている。これは実際に古、中期の英語の文献を読み解く上で重要なものであり、まさに単語の綴りの歴史的変遷を表したものであるが、今回特に注目したのはその単語の語義の歴史的変遷であり、それは後の三つの要素である。このOEDの三つの構成要素を実際に‘with’をケーススタディしながらみていく。

2.3 ‘with’の語義の構成

OEDにおいて説明されている‘with’の語源の概略は以下の通りである。

- 最古の時期、‘with’の主な意味概念は‘反対’(against)と‘近接’(towards, alongside)であり、これは現在でも、昔からの熟語や特別な言い回しに残っている。これらの意味概念は、いろいろな関係(相互関係を含む)を表す形に使われるようになった。
- ‘with’の意味の最も顕著な発展は中英語期(1150から1500頃)に起きた。それは‘mid’という意味概念が含まれるようになったことである。これらの意味概念は、‘関連’、‘共同’、‘合同’、‘合併’、‘手段’、‘付随する状況’、といったものである。
- 最後の段階で‘with’は、‘道具、手段’等を指す用法から、それまでof, through, by が用いられていた、動作主を指す用法まで拡張されていった。

これから‘with’の語義の歴史的変遷は大きく三段階に分れていることがわ

かる。それにたいしてOEDにおける語義の大きなグループ分けについては以下のようになっている。

- I. Denoting opposition and derived notion(separation; motion towards).
- II. Denoting personal relation, agreement, association, connexion, union, addition.
- III. Denoting instrumentality, causation, or agency.

さらにII.についてはさらに次の三つに分類されている。

- * Senses denoting primarily activity towards or influence upon a person or thing.
- ** Senses relating to agreement(or instrument) in some respect.
- *** Senses expressing accompaniment or addition.

以上の分類に、1~40までののさらに詳しい語義の分類が表2のように属している。

I.	1~6
II.*	7~11
II.**	12~18
II.***	19~36
III.	37~40

表2: OEDにおける語義の分類

また、1~40の各語義についても、アルファベットでさらに細分されている語

義もあり、最終的に例文を情報をもつ語義は、合計 96 個にもなる。これは膨大な量であり、はっきりいってすべてを完全に把握することは不可能に近い。

ここで重要なことは、語義の大別が 'with' の歴史的変遷に従っており、語義は階層構造として分類されている、ということである。特に階層構造になっているということは、紙面ではその効果が良く分らないが、後に述べる通り実際に語義の表示方法を階層別にすることでその単語の全体像を把握できやすくなる。

では次に引用されている例文について述べる。

2.4 引用されている例文

単語を理解する上で例文の果たす役割は大きい。語義だけではその単語をいつどんな場面において使用するかという、いわゆる TPO をつかみにくい。

OED において例文は基本的に表 3 の要素で構成されている。

<i>date</i>	年代、時代区分
<i>author</i>	著者、後 BIBLE など
<i>title</i>	タイトル及び章、節など
<i>text</i>	引用例文

表 3: 例文の構成要素

まず年代について注目してみる。各語義の最初に引用されている例文の年代を見れば、いつ頃からその語義が使われるようになったかがわかるし、廃れた語義については、最後に引用されている例文の年代からいつ頃から廃れていったかがわかる。つまり、その語

義についての盛衰の歴史がわかるのである。

一例として I. 13. の語義 'Of resistance, defence, protection, warning, caution' を調べてみると最初の例文の年代は 540 年、一方最後の例文の年代は c1350 年である。よってこの語義は前古英語の時代から用いられており、後期中英語の時代には廃れはじめ、近代ではつかわれることがなくなった、ということがわかるのである。ちなみにグループ I. に属する語義は一つを除いてすべて廃れた語義になっている。また各語義の最初に引用された例文の年代をみることで、語義が I-II-III. の順に使われるようになった傾向も読み取ることができ、ここからも語義の歴史的変遷を見ることができる。

次に引用された例文そのものについて注目してみる。前置詞 'with' に引用されている例文の総数は 777 個である。時代区分別にわけてみると表 4 のような結果となった。

時代区分	数量
古英語 (450~1150)	35
中英語 (1150~1500)	214
近代英語 (1500~)	528

表 4: 引用されている例文の時代分布

引用されている例文は、その時代の原文のまま抜き出されている。そのため各単語の語形もその時代のものそのままである。基本的に近代英語の例文は現代英語の知識があれば理解することができるが、時代を遡るにつれて例文の意味を理解することが難しくなる。古英語期の例文にいたっては、各単語の

語尾の複雑な屈折のせいもあって、古英語の知識なしで理解することは不可能である。そこで今回、それぞれの例文について現代英語、さらには日本語に訳して、その情報をインターネット上で参照する際に付け加えて表示してみることにした。このことにより、例文の意味を理解できるようになり、そのことが語義のより良い理解につながる効果を期待してのことであった。

しかし、この作業はかなり難航した。その理由は古英語及び中英語の難しさもあるが、引用された例文が一文のみなのでニュアンスがとりにくく、正確に訳すには文献自体に当たる必要が生じるからである。そのためこの作業はまだ一部の例文を訳すのにとどまっています、現在も進行中である。

2.5 評価

OEDにおける‘with’を歴史情報という観点からみてきたがどうであろうか。‘with’は実にさまざまな語義をもっているが、語源を知ること、そして語義の大別を知ることによってその単語の全体像をつかむことができる。また例文によって実際の使われ方だけでなく、その単語の語義と綴りの変遷を知ることができる。これらは単語に対する理解を深める、重要な鍵となり得る情報である。

しかし、これらの情報は有用であるが、一方で辞書においては多すぎる情報が検索速度の低下につながることもたしかである。英単語学習のための辞書といっても、それは単語そのものについて学習するために使われるだけでなく、英文を読み進めていく上での道具としても使われる。また学習者のレ

ベルに応じて必要とされる情報も違うであろう。またいったん語源情報を知れば、次に引くときにわざわざその情報を見る必要もないだろう。そのため現実には用途、レベルに応じてさまざまな辞書が存在する。

しかし逆に、使用者の要求に応じて情報を提供し表示する辞書という存在を考えてみてはどうだろうか。それぞれ電子時代の辞書に必要とされる能力ではないだろうか。次に説明する、今回の‘with’のケーススタディの結果を表示するインタフェースはそのようなことを念頭におき試作した。

3 インターフェースについて

3.1 目的

今回のインターフェースの試作にあたって考慮したことは次の二つである。

- インターネット上でWWWブラウザから参照できるようにする。
- 今回のケーススタディの評価を生かした表示方法にする。

将来の辞書の一形態としてインターネット上で利用できる辞書というものは当然考慮されるべきものであるし、現在でもちらほらと散見できる。また公開することで他人の目に触れ、その意見をとりいれることで、研究に反映させることが簡単にできるということもある。

一方表示方法であるが、電子辞書というものは既に存在しているが、その多くは単に紙面をそのまま移したに過ぎないので、計算機上で使える利点を

十分に生かしているとはいえない。そこで今回は歴史的原理に基づいて階層構造に分類されているOEDの‘with’の特性を生かし、計算機上でその語義を階層別にたどれるようにしてみた。こうすることにより生じる利点は幾つかある。一つは単語の全体像が把握しやすいということ、もう一つはユーザの要求に応じて情報を与えることができるということである。

3.2 仕組みと機能

今回試作したインターフェースの仕組みについて簡単に説明する。

結果は既にデータベース化してある。このインターフェースはCGIを利用し、ユーザーの要求に応じてデータベースシステムに対して問い合わせをし、その結果を表示するようになっている。ユーザーは、語義の階層構造をたどっていく方法、年代を指定する方法、引用された例文の著者名を指定する方法、この三つによって検索できる。実行例を図1に示す。

4 まとめ

今回は歴史的原理に基づいて編纂されたOEDの構造を‘with’に関してケーススタディしながら探り、その結果をインターネット上で公開するために試作したインターフェースについて紹介した。歴史情報は語義を理解する上で役に立ち、また階層構造に従ってそのまま表示するということは、多くの語義を持つ単語の全体像をつかむことに有効であることがわかった。

OEDの編纂主幹 Sir James A. H. Murray は、辞典は事典でないとし、「辞

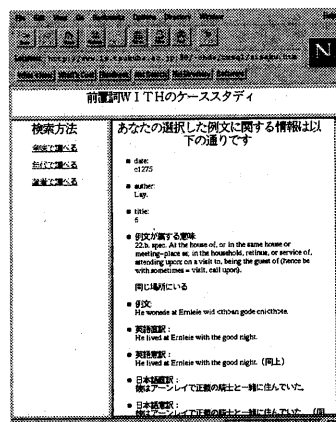


図 1: インタフェースの実行例

典は語を説明するものであり事典は事物を叙述するものである」と定義したが、計算機やインターネットの発展にしたがって、文字であらわされる森羅万象すべてのものについて、文字のみならず画像、音声によって説明するあらたなマルチメディアの辞(事)典の実現が可能になりつつある。

参考文献

- [1] 「The Oxford English Dictionary Second Edition on Compact Disc」 OXFORD UNIVERSITY PRESS, 1994
- [2] 今里 智晃、土家 典生「英語の辞書と起源」大修館書店,1984
- [3] 大出 真、「ハイパー辞書における‘with’を対象としたケーススタディ」平成八年度 筑波大学情報学類卒業研究論文,1997